第三種接近遭遇

春江口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第三種接近遭遇

【Ｎコード】
Ｎ８４６１Ｌ

【作者名】
春江口

【あらすじ】
ついに一台のとてつもなく大きな宇宙船が地球に降り立った。
短編で簡単に読めます。若干の仕掛けがあり、ある程度読み進めないと気づかないかもしれません。

chapter 1

ついに一台のとてつもなく大きな宇宙船が地球に降り立った。
しかし非常に無礼なことにその宇宙船は都市のど真中に着陸し、着陸地点にあったビル、ハイウェイ、人、車、その他は皆完璧につぶされてしまった。
結局これでバージニア州のほぼ半分がつぶされたことになる。
事態は深刻だが、人々が事件の全容をつかむまでに相当な時間がかかった。
なにしろあまりにも大きな代物だったので、何が降ってきたのか、何が起こったのか、てんで見当がつかなかったのだ。

この恐ろしいほどスケールの大きな事件に直面した人々がまず最初に思ったことは『大変なことが起こった』というだけで、その言葉が頭をいっぱいにしてしまい、次に進めなくなっていた。
宇宙船が着陸したまわりにいた人々は何万人にものぼるが、その誰一人として一言もしゃべらず、何も考えられず、ただぼーっと巨大な物体を眺めていた。

そしてただそれだけだった。

何も起こらない時間がどんどん過ぎていき、くずれかけたアパートの窓から一部始終を見ていた婦人は、今、この街は平和なのではないかとさえ思っていた。
車の炎上する音、ビルの破壊音、地響き、子供の泣く声が聞こえる。
起こったことといえば、車が炎上し、ビルが破壊され、地響きが轟き、子供が泣いただけ。
それ以上は何も起きなかった。宇宙船が降りてきたにもかかわらず。

さらに長い時間が過ぎ、宇宙船の最も近くにいた男がふと、
「あれはＵＦＯじゃないのか？」
と言ったちょうどその頃、宇宙船の着陸を見ていたすべての人々がようやく頭を活動し始め、目の前にあるでかぶつの正体を知った。
そしてこのでかぶつがしでかしたことによる被害と影響を考え、またこれからの地球、これからの自分の人生について考え、今度こそ本当に、かなり具体的に『大変なことが起こった』のだと確信した。

人々はざわめき、悲鳴をあげ、卒倒した。
おびえる挙句その場から逃げ出す人々でごった返し、あたりは収集がつかなくなっていた（これでもどれだけ状況が進展したことだろう）。

平和なときは終わった。

突如として巨大な物体の一部分が光り始め、そこから二つの何かが地面に降りてきた。
その何かは失敗した粘土細工なのか、泥で作った人形に絵の具で色をつけたものなのかわからなかったが、どうやら知性のある生物のようであった。

身長三メートルくらい、全体の形は刻々と変化する不定形。
深緑色の皮膚がどろどろと動いていて、時々それが液体となり、しずくとなって地面にしたたり落ちた。
目、耳、鼻、口、どれもどこにあるのかわからなかった。
気味の悪い姿にもかかわらず、なぜかうまそうだった。

異星人の一人はしきりに体の内部から内臓の動く音と思われる奇妙な音を鳴らし始め、くねくねと動く手のようなものをまるで地球を

指し示すかのように広げた。
逃げまどう人々は異星人が見せたその動きにまたもや思考を停止し、
その場に立ちつくした。

「あれは宇宙人じゃないのか？」
と一人の男がつぶやいた。

chapter 2

「見たまえ、やはりここにも生物はいないようだ」
と地質学者は手を広げながら言った。

「そのようですね」

生物学者はそう言ってはみたものの、結論を出すのはまだ早いのではないかと思っていた。
完全に調べきるまでは、調査結果で生存確率がゼロと出るまではあきらめてはいけない。
この星の裏側には私のふるさとにある『空の映る大地』と呼ばれる美しい森にそっくりな緑が広がっているかもしれないじゃないか。

しかし現実はそうではなかった。
三百六十度どこを見渡しても生物学者の脳裏に広がった情景を思い起こせるようなすばらしい景色は存在しなかった。
彼は早くも自分の考えが馬鹿げていることに気づき、ため息をついた。
やるせない気持ちが彼を取り囲み、脱力感が体を支配した。

「今回も無駄だったようだな」

生物学者は返事をしなかった。
地質学者は今言った言葉が、憂鬱感を漂わせるただの独り言になってしまったことを後悔した。

「とりあえず地質と空気成分、それから微生物がいるかどうかを調べるから機械をセットしてくれ」

地質学者は事務的にそう言うと、不自然なほど直線的な形をした岩山へと歩いていった。
生物学者はというと、機械を作動させながらもまだ絶望感から立ち直っていなかった。

今回も無駄であった。
この調査艇で行ける範囲内の、生物の存在しそうな星は隅から隅まで入念に調べた。
さらにとても生物が住めそうにない、こんな絶境の地までわざわざ降りたって調査しているというのに、生物どころか生物のいた痕跡さえ見つからない！

生物学者のしなやかな五本の腕はむなしく宙を舞った。
彼はつい感情を高ぶらせ、こぶしを振り上げてしまった。

私達二人はいったいどれだけの星を調べてきたのだろう。
その昔、我が調査団体が政府から正式な名称と重要な任務と莫大な予算をもらっていた頃、生命体との遭遇の可能性は無限にあるように思えた。
いつか必ず衝撃的な出会いがあると信じ胸躍らせてきたあの頃に比べ、なんと歳を取ってしまったことだろう。

調査のために費やした時間はあまりにも長く、また結果の出ないむなしいものであったのは確かだ。
今ではたったの二人きりで何のスポンサーもない、存在の意義自体が危ぶまれている団体になりさがっているのも確かだ。
しかしあまり期待もせず、こうしてだらだらと調査を続けることに慣れてしまっていいのだろうか。
実際地質学者の方も、もううんざりしているのではないだろうか。

そう思うと実にやるせない気持ちになり、思わず地質学者の方を振り向いた。
地質学者は何をするでもなく、薄白い居丈高な岩の塊を触っていた。
地質学者の背中を見ていると、そのまわりにある景色が視界に入ってきた。
不自然なほど直線的な形をした岩山の広がり、無意味な幾何学模様をした土砂、自然の作ったすばらしい、そしてさびしい荒野。
さまざまなものが生物学者の目に飛び込み、それがどんどん孤独感を生んだ。

ただの荒地だ。
生物学者は独りごちた。

chapter 3

「あれは宇宙人じゃないのか？」

一人の男が言った。
彼はこのあたりでは最もマシな人間であり、唯一脳が活発に動いている人間だった。

男はとりあえず横にいた中年の男に今言った言葉に対する同意を求めようとしたが、中年男の醜い顔はロボットみたいで何の変化もなかった。
その表情には彼が何も考えていないことを克明に表していた。

男はさらにまわりの人々に返答を求めようと振り返ったが、残念なことに皆、死んだように硬直し、揃いも揃って中年男と同じ顔をしていた。
顔についてある器官全部が大きく開き、そのすべてから液体を垂れ流していた。

こりゃだめだ。

男は地球人に取り入るのをあきらめ、異星人の方へと目を向けた。

とりあえずこいつらをなんとかしなくては。

男はまず向かって右側の異星人の方へゆっくりと歩み寄り、何をしてこようともすぐさま反応できるようにじっと睨めつけ、神経をとぎすませた。
かなり近寄ったところで震えを押さえながら、

「おい」
と話かけてみた。
しかしその異星人はくるりとそっぽを向き、てくてく（この表現が正しいかどうかはわからないが）と道路の反対側まで行ってしまった。
歩道にたどり着くと、異星人はビルの壁面をていねいに触り始めた。
男はばつが悪くなり、すかさずもう一人の異星人を見た。
そいつはぎゅるぎゅると音をたてたかと思うと、自分のわき腹からゲル状の薄気味悪い物体を取り出し、びちゃっと地面に投げつけた。
その物体は気色の悪さに拍車をかけるかのごとく、ぶよぶよと動いた。
これが友好のしるしとしての贈り物でなきゃいいんだが。
男はそう思った。
しばらく観察しているうちに異星人は背丈を低くし、ゲル状の物体をまさぐり始めた。
男は好奇心にかられ、つい物体のそばまで近寄ってしまった。
そのときである。
突然男の目の前にいた異星人は、彼に向かって何本もの触手を突き出してきた。
とっさに彼は後ろへ飛び跳ね、かろうじて触手の攻撃を防いだが、その拍子に足がすべり、後頭部を痛打してしまった。
群衆から悲鳴があがり、驚愕の声がもれた。
人々の目には今の出来事は明らかに敵対行為に映った。
「大丈夫だ」

男は立ち上がると皆が騒ぎ出さないよう、努めて平常心でそう言った。
額から汗がにじみ出るのを感じながら彼は群衆を見た。
するとそこには何百何千もの期待に満ちた対(つい)の目玉があった。

おいおいちょっと待ってくれ。
俺に何をしてほしいんだ？

男はひるんだ。
が、男のまわりにいた人々は容赦なく彼に期待のまなざしを送った。
誰もその場から避難しようとせず、かたずを飲んで男の行動を見守った。
男はしばし途方に暮れた。
そして今までの過去を振り返り、こんなにも人から注目されたことがあったかどうか記憶を辿った。

もしかすると俺は今、とてつもない責任を背負っているのではないだろうか。
人類と宇宙人との初めての遭遇で俺は人類代表として地球側のホスト役を勤めなければならない。
もしこのコンタクトに失敗したら、地球は危険にさらされる。
そのとき全世界の人間が俺を許してくれるだろうか。
許すもくそもない。
我が愛する緑の地球はこの粘土細工の化け物に支配され、人類は滅亡する。
俺はと言えば……、皆からののしられ、リンチを受け、挙句の果てに死刑だ。
人類滅亡の前に一足お先に死が訪れる。
これは一世一代の大仕事だ。

訳のわからぬ使命感が芽生えてきた男は、群衆に向かって大きくうなずいて見せた。
群衆はさらなる期待を抱き、男を見つめた。

「さて」

さてどうしようか。
急に何もかもをまかされてしまったその男は、くるりと異星人の方へ向き直り、考えた。

chapter 4

生物学者はじっと調査器を見ながら結果が出るのを待っていたが、目の焦点はしだいに調査器の向こうへとずれていき、虚空を見つめた。
最近は作業中にぼんやりすることが多くなった。

落胆していてもしょうがない。

生物学者は気分を入れ替えようと体を伸ばし、景色が良く見えるよう体勢を整えた。
辺りは相変わらずの風景だったが、彼のごく近くに一つの流動体がうごめいていることに気がついた。
視覚的には活発な運動は見られず、また地面を這うように動いているためにその存在自体は目立たなかったが、確かにまわりの岩石とは異なる、水分を多く含んだ個体であった。

この付近の星系にしては珍しい分子構造だな。

彼が成分を調べてみようと思って手を伸ばすと、まるで彼の手から逃れるように物体は後ろへ下がった。
生物学者の顔に微笑が戻った。

そのとき調査機から心地良い音のブザーが鳴り、調査の完了を告げた。
生物学者は機械のモニターを一目見て、結果の続きを見るのが嫌になった。

「ちくしょう、ひどい星だ！」

調査結果は悲惨なものだった。
生物が生きていくために最低限必要なものは何一つなかった。
上空より調査艇から調べてみた値とほぼ同じ。
こんな機械を使って調べてみるまでもなく、この星に生物が住めないことはわかりきっていたのだ。

彼は意気消沈する自分の心情をごまかすように勢いよくすっと立ち上がり、調査機からモニター部分を取り外し、結果を見せるために重い足取りで地質学者の方へと歩いた。

地質学者は相変わらず岩の壁面を、腕にある三つの感覚器で観察していた。

「この岩が何でできているかわかるかね？」

地質学者はモニターも見ず、そう言った。

「主成分は１０１２２と６６８９４です。２１１２５と水和反応して固まっていますね」

生物学者はえらく形式ばった言い方をした。

「すごいとは思わんかね。まさに自然現象が作り出した芸術だ」

物理法則という芸術家が何億年もの歳月をかけて創り出した作品か。
なるほど確かにすばらしい。しかし――。

「この岩はその辺にある土砂とあまり変わりはありません。ですが無機物がこのような分子構造に変化するのはきわめてまれです。あ

るいは人工的に作られた、という可能性もないとは言い切れません」
生物学者はつい口をすべらした。
しまった、という思いからか生物学者は目を閉じていた。
「確かにまれかもしれない。それは認めよう。しかし何の人為的作用もなしにこうした物質ができあがるケースがたくさんあることは君も知っているよな。たとえばこの前行った第六惑星では――」
「ええ、わかってます」
彼には十分過ぎるくらいにわかっていた。
彼はどうしても夢を捨て切ることができなかったのだ。
そんな気持ちを察してか、地質学者はこれ以上この話題を続けようとはしなかった。
しばらくの間、二人に会話はなかった。
「長旅のせいでしょうか、こうも荒れ果てた星ばかりを見ているとふと考えることがあるんですよ」
風が吹いていた。
あまりにも穏やかなすがすがしい風が二人の間をかけ抜けた。
そして悲しき学者達をなぐさめるかのように頬をなで、腕をなで、全身を抱擁した。
「どんなことを？」
「たとえば、ほら、あそこに高分子の流動体があるでしょう。あれがもしかしたら原子的な生物じゃないかって私は思うのです。もしあれが生物だったらいいのになあってね」
「ははは。なんでも生き物に見えるんだな、君は」
「ええ、小さい頃からそんなことばっかり考えてました。まぁそれ

がきっかけで生物学者になったんですけどね。ほらあの流動体、まるで自分自身の意思で動いているようにも見えるじゃないですか。見えませんか？」
「まぁ確かに面白い動きをしているとは思うよ。しかし……」
「もちろんわかってます。無機物があのような動きをしても全然不思議じゃないことはね。ただあれが生物だったらと想像すると、なんて言うか……、すごく楽しい気分になりますよ」

生物学者は本当に楽しそうだった。
その表情には子供のように無邪気な笑みが浮かべられていた。

「ほらほら見てください、噂をしてる間にどんどん流動体達が集まってきましたよ。まるで私達を迎えてくれているようじゃないですか」

地質学者は胸のあたりで手を広げ、おおげさな口調で、
「諸君達、歓迎ごくろう！」
と言った。

二人は少し笑った後、隆起した岩に腰を下ろした。

今日の作業はこれで終わり。
いつものことながら、味気ない仕事だった。

chapter 5

男の右手にはどこから拾ってきたのか、大きな業務用の金づちが握られていた。
よく見るとその金づちは上下に小刻みに振動し、男が恐怖に震えていることを示していた。

「おい」

男はもう一度、話しかけてみた。

「おまえは宇宙人だな」

目の前の薄気味悪い生物は、じっとゲル状の物体の前に立ったまま（立っているのか？）身動きしなくなった。
男は勇気を奮い立たせ、一歩一歩、まるで地面の感触を確かめるかのようにじり寄り、異星人の前に立った。
そしてそいつと背丈を合わせるようその場にしゃがみこみ、じっと観察した。

たぶんこの辺が顔だろう。

男は目とおぼしき器官のついた部分に視線を合わせ、ぐいっと顔を近づけて相手を睨んだ。
しかし睨らんだ対象は何の反応も示さなかった。

奴らの行動は俺達を無視しているとしか思えない。
彼はそう考えた。
何が気に食わないのか。

さっき触手で威嚇されたこともあるし、どちらにしてもあまり友好的な態度だとは言えないな。
もっと慎重にことを進めなければ俺の命も危険にさらされるだろう。
そこまで考えると、男は視界の広範囲にわたって生物のどろどろとした様子が映っていることに気づき、あまりの気持ち悪さに思わず吐きそうになり、たまらず下を向いた。
下には下でぶよぶよとした物体がうごめいている。

こりゃなんだ？　ゼリーか？

男は感触を確かめたくなり、おそるおそる人差し指を近づけ、つついてみた。

「ピ――――――――――」

突然ゲル状の物体から外観からは想像できない、まさかと思うほど電子的な高い音が鳴り始めた。
男はあまりの驚きにみっともない叫び声を出しそうになったが、あわてて口を塞ぎ、声が出るのをおさえた。
尻餅はついたが、逃げはしなかった。
かろうじてその場に踏みとどまり、人類のリーダーとしての威厳を保った。

何秒か後、やっと平然とした顔を作るのに成功した男は、後ろの群衆に振り返り、大丈夫だというしぐさを見せた。
群衆からは安堵の声が漏れた。

男は額の汗をぬぐい、起き上がろうとした。
目の前にいる生物は、そんな男の様子などまるでおかまいなしとい

った感じに、ぐにょぐにょと体を動かしながら、道路の向こう側にいるもう一人の異星人の方へさっさと行ってしまった。
二人の異星人達はビルの真ん前に並んで立ち、しきりに内臓を鳴らしあっていた。

異星生物との距離が離れたことで、張り詰めていた緊張の糸がほぐれた男は、後ろのギャラリーに聞こえないよう小さくため息をついた。
正直もう家に帰りたかった。
残念ながら男の家は巨大な宇宙船の下敷きとなってしまっていたが。

男は群集の方へ向き直り、皆の様子を見た。
期待に満ち溢れる無数のまなざし。

もうこの場から逃げられないんだな。

そう悟った男は、意を決したように立ち上がり、異星人達の方へと慎重に歩き始めた。
驚いたことに辺りにいたほぼ全員の人が、その勇敢な男の後をついていった。
一人を先頭にして、大勢の群集がぞろぞろと異星人のいる場所へと歩を進めた。

男は異星人達から二メートルほど距離を置き、ぴたりと立ち止まった。
後ろからついてきてた人達もあわてて足を止めた。
次に男は右手に持っていたかなづちをぽいっと脇へ投げ捨てた。
後ろにいた群集から驚きの声が漏れる。
そして両手を上げ、自分は攻撃を加えるつもりはない、という意思表示をした。

またもや後ろの群集から驚きと、さらに感嘆の声が漏れる。
「大勢で押しかけてすまない。威嚇しているつもりはないんだ」
優しい口調だった。
男は先ほどとは異なる接し方に路線変更したようだ。
残念ながら二匹の緑色をした化け物は、その言葉に応答する様子はない。
「気を楽にして聞いてくれ」
二匹の姿勢が若干変わっただろうか。
男の言葉に反応し、歩道の柵にもたれかかったように見えなくもない。
「君たちの乗ってきたアレだが……、着陸する場所が悪かったようだね。おかげで我々は莫大な被害をこうむった。それについてはなんらかの弁償をしてもらうつもりだが、今後このような――」
そのとき片方の異星人が体を大きく膨らませ、細長い二本の触手を広げた。
その腕のようにも見える触手は、だんだんと横へ伸びていき、異様なほど長くなった。
その光景に男は一瞬ひるんだが、努めて冷静に言葉を続けた。
「今後このようなことはしないと約束してくれるのであれば、こちらからは危害を加えない……、と言うかえーとその、腕だと思うんだが、そいつを下ろしてくれないか」
恐らく言葉が通じていないのだろう、異星人は広げた腕をひっこめ

ようとはしなかった。

「念のために言っておくが、俺がケガをするようなことになれば、ここにいる連中は黙ってはいないぞ」

黙っていない？

先頭で事の成り行きを見守っていた若い女性は、男のその言葉に違和感を感じ、まわりの人々の様子を伺った。

誰もがうつむいたり、女性から目線をはずしたりした。

ああ、やっぱり。

この人達は、何かあったらきっと逃げ出すに違いない。

女性はそう思い、目の前で必死にがんばっている男を哀れんだ。

男の斜め後ろにいた太った男性は、念のため警察かもしくは軍隊を呼んでおいた方がいいのではと考え、携帯電話を取り出してみたが、画面に映る『圏外』のマークを見て、少しずつ後ずさりした。

良く見えるようにと少し離れたところで見物していた白髪の老人は、隠れるように人の輪の中に入り込んだ。

先ほどの女性はすでに群集の最後尾へと移動していた。

じわじわと先頭に立つ男と、それを見守る人々との間に距離が開き始めたが、男はその変化にまったく気づいていない様子だった。

chapter 6

地質学者は荒涼とした岩だらけの大地を見つめていた。
期待はずれの寂れた景色は、いつもながらに自分を感傷的にさせる。
いつしか彼は、二人で頑張ってきたこの数十年間の出来事に想いをはせていた。

あちこちの星系を飛び廻り、がむしゃらに調査を続けてきたこと。
つらいこともたくさんあったが、楽しいことの方が多かったこと。
残念ながら成果はゼロに等しかったこと。

たくさんの思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡る。
そろそろ潮時かもしれない。
地質学者はゆっくりと口を開いた。

「私はね、今日をもって現役を引退しようと思う」

生物学者に驚きはなかった。
日頃の言動から薄々感づいていたのだろう。

「お疲れ様でした」

そう返すのが精一杯だった。

「君と過ごした日々は一生忘れないよ。本当にありがとう」

地質学者はそう言うと、生物学者の肩にそっと手を置いた。
長かった生物探求の旅はこの星で最後になるだろう。
一人になってなお調査を続ける気力はない、と生物学者は思った。

しかし本当にここで調査を終わりにして良いものだろうか。

「我々のやってきたことは本当に正しかったのか、今でも不安に思うことがあります」

「確かに、我々には『他星での生物の発見』という偉業を成し遂げることができなかった。調査区域の選び方が悪かったのか、調査の方法が悪かったのか、色々要因はあるだろう。しかし我々は精一杯やってきたと思うよ」

「もちろん私達はできる限りのことをやってきたつもりですし、今までに採り貯めた調査結果の膨大なデータは、科学の進歩に大きな影響を与えたという自負もあります。ただ……」

生物学者はなかなか次の言葉を口にすることができなかった。

つい最近から自分の中に湧き始めた疑問。

それはまだ夢を追っていたいという願望が作り出した、単なる虚構かもしれない。

こんな話をしても地質学者が返答に困るだけだ。

そう思いつつも生物学者は言い出さずにはいられなかった。

今が自分の考えを伝える最後の機会かもしれない。

「私達が無生物だと思っていたものが実は生物なのだとしたら……、私達は目的のものを目の前にしていながらそれらを無視し、通り過ぎようとしているかもしれない。地質学者さん、あなたは何を持って対象物を生物であると判断しますか？」

地質学者は突然の質問に面食らった。

いまさら生物の定義を議論したところでなんになるというのか。

「生物と無生物との線引きはどこか、ということかね？」

「たわいもない雑談ですよ。馬鹿げたことを言ってるな、くらいの

気持ちで聞いてください」

生物学者は努めて軽い口調でそう言い、言葉を続けた。

「私達は頭で物事を考え、自分の意思で動くことができます。当然のことながら無生物は自分勝手に動くことはありません。意思や自我がないからです。例えば……、そうだな、あれをご覧ください」

生物学者は、ぽつんと一つだけ群れから離れている一つの流動体を指差した。

「あの流動体も私達の目から見れば、自分の意思で動いているようには見えません。ただただ自然の摂理に沿って、なんの変哲もない動きをしているだけのように見えます。一方で、物質を量子レベルで見ると、その動きは私達の物理学を持ってしても、完全な予測は不可能です。確率でしかあらわすことができません。と言うことは、あの流動体の動きは、厳密に言うと物理法則だけでは説明がつかないんです。つまり『彼』が自分の意思で動いているのか、そうでないのかは私達には判断できないんです」

生物学者は、今や愛着すら感じられるその流動体を擬人化し、『彼』と呼んだ。

そして『彼』を片手で鷲づかみにし、てっぺんから調査器のセンサーをぶすりと突き刺した。

「生物である私達も、無生物である『彼』も、構成要素は同じ無機質な素粒子です。ミクロな世界までたどれば、お互い無機物の固まりにしかすぎません」

「しかし分子構造は大きく異なるよ。少なくとも『彼』の分子構造では、恒常性維持（ホメオスタシス）が無理なのではないかね。ほら見てみなさい、も

う形が崩れ、中の水分が流れ出してるじゃないか」
その流動体は、するどい先端をしたセンサーが突き刺さったおかげで、外骨格が砕かれ、崩れた部分からおびただしい量の水分を放出していた。
放出された赤い液体はきれいな放物線を描き、辺り一面に飛び散った。
なぜかそばにいた無数の流動体達は、くもの子を散らすようにその場から離れていった。

「それに生物特有の生体反応が見られないね」
地質学者は、『彼』の内部にある柔らかな繊維体がぴくぴくと痙攣しているのを見ながら、そう言った。

「『生体反応』という言葉も定義の難しい言葉です。我々の言う生体反応とは、現象面だけで言及すると、しょせん分子による化学反応の総和に過ぎないんです。でも『彼』だって化学反応は絶えず起こしてるんですよ。モニターをご覧ください」
生物学者は調査器のモニターを取り外し、地質学者に渡した。

「おおまかに言うと、酸素を吸収し、二酸化炭素を生成しています。もしかすると、これが『彼』の生体反応かもしれません」
そこまで言うと、生物学者は自嘲気味に微笑んだ。
地質学者は何も返答せず、ただ黙っていた。

しばらくの間、二人に会話はなかったが、生物学者はそれでも充分満足していた。

自分の中にウミのように蓄積していた奇妙な考えを、今日ようやく地質学者に伝えることができた。
その事実だけでもう充分だった。

「例えそれが生物だったとしても」

地質学者はぽつりと話し始めた。

「我々にとって理解の及ぶものでなければ、そのことにあまり意味はないね」

まったくその通り、というように生物学者は大きくうなずいた。

先ほどの流動体はもはや痙攣さえしなくなっていた。
さっきまでの活発な運動は観察できなくなり、まるで死体のように生物学者の足元にぐったりと横たわっていた。

「とりあえず、サンプルとして持って帰りましょう」

生物学者は流動体を両手で抱えて、二三度振り回して水を切り、脇にぶらさげていたサンプル採取用のバッグに詰め込んだ。

それは、彼ら二人の最後の作業だった。

chapter 7

一九六九年七月二十日、アポロ十一号は人類史上初の月面着陸に成功、その様子は全世界に中継された。

船長のアームストロングは船から降り立つ際、月面の様子を「ほとんど粉のようだ」と説明した。

数億人にものぼると言われているテレビ中継を見た人々は、生物などとても住めそうにない荒涼とした岩だらけの映像を見て、月へ抱いていた夢を捨てざるを得なかった。

また同年、月より持ち帰ったサンプルの分析結果より、「月に生物の痕跡なし」との声明がＮＡＳＡから発表された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8461l/

第三種接近遭遇

2010年10月16日09時40分発行